

いもう 葦毛通信

平成 29 年 9 月 26 日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町 3 丁目 1
TEL : 0532-56-6060

No. 56



ミカヅキグサ

1、2017モニタリング報告-4

1) G・S地点(一の沢)

一の沢では水量の多い上流部を中心に様々な湿性植物が発芽・開花しています。

上流部の東側は地表面が広くコシダの根の層に覆われ乾燥しています。11月にはバックホーを使って抜根し、このコシダの根の層を丁寧に剥がし、その下に溜まっている**黒色土**(湿性植物の埋土種子を多く含む**土壌シードバンク**)をできる限り攪乱せず、直接太陽の光が当たるようにする予定です。

コシダの根の層の縁からはトウカイコモウセンゴケ、ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ等が発芽・開花しました。これらは葦毛湿原を代表する食虫植物ですが、木を伐る前の暗い森の状態では見られなかった植物です。発芽した場所はコシダの根の層の周縁部で、コシダの根が無く、一の沢の水の流れの近くで水量があり、黒色土が溜まっている部分(右写真手前右側)です。つまり、コシダの根の層を正確に除去すれば湿性植物が復活することを示しています。

これ以外にはシラタマホシクサやミズギボウシ等も発芽・開花しました。



一の沢上流から下流へ(2017年9月20日)



ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ

木を伐った上流部のさらに上は国有林です。今回天然記念物指定地部分の木を伐ることにより境界近くの国有林内でも、日照が改善され、ミズギボウシやサワギキョウ等の湿性植物が発芽してきました。国有林内は植生回復作業を行っていませんが、指定地内と同様の植生回復作業を行えば、良好な湿地に戻すことが可能であることが分かります。

また、指定地との境界から 100m 程上流が崖になっており、この崖から湧水しています。つまり、この崖が一の沢の源流部にあたります。この水が湧き出している所まで木を伐って日照を確保することができれば、一の沢湿地全体を復元することができます。



トウカイコモウセンゴケ



シラタマホシクサ

下流部は、大規模植生回復作業前にかろうじて湿地状態を保っていたところです。ここにはサワギキョウが森の中に隠れるように小さな群落を作っていました。昨年の作業で周りの木を伐って日照を十分に確保したところ、分布範囲が広がり、個体数が増えたようです。まだ、満開には程遠い状態ですが、10月上旬頃には満開になると思われます。

一の沢は明るくなることにより、一の沢の水の流れの周辺で

多くの湿性植物が出現しました。しかし、上流部は広い範囲でコシダの根の層が覆っており、乾燥化しています。下流部は湿地の周縁部にミズゴケが堆積し、フカフカで厚いマットを敷いたような状態になって乾燥化しています。11月に行うバックホーによる抜根やコシダの根の層の除去作業を行えば、これらの部分が良好な湿地に戻ると予想しています。



一の沢下流部のサワギキョウ

2、復活した植物

今年は、これまでに**コオニユリ**、**ヌマトラノオ**、**トモエソウ**の3種の植物が新たに復活しました。これで、葦毛湿原では**地上絶滅**して見られなくなっていた**21種**の植物のうち、**14種**が復活したことになります。その多くは、20～30年以上前から土壌シードバンクに眠っていた埋土種子からの発芽で、大規模植生回復作業の**適度な攪乱**により発芽環境が整えられ、休眠が打破されて復活したものと考えられます。

1) コオニユリ

コオニユリは1990年代までは、L・M地点を流れる沢の木道沿いにいくつも見られたそうです。L・M地点は平成26年度の作業で木の間伐と除草を行い明るい森を復元したところです。作業後はコオニユリの復活も期待していましたが、すぐには復活しませんでした。作業後3年目の今年やっと復活してくれました。おそらく20年以上前の埋土種子からの復活と考えられます。

発芽したのはL地点の北側のM地点で、間伐して明るい森にしたところです。コオニユリは2株が復活し、開花しました。木の伐採と除草を行っただけで、表土層の除去は行っていません。今後はL地点でも復活することを期待しています。

M地点では作業後1年目にタムラソウが発芽・開花し、今年も多く見られるようになりました。タムラソウの花はキセルアザミの花とよく似ており、しばしば間違えられますが、葉には刺が無くかなり異なります（下写真）。タムラソウは大規模植生回復作業前にはE地点に数株が残るだけで、絶滅寸前の状態でした。



コオニユリ



タムラソウの花



タムラソウの葉（刺が無い）



キセルアザミの花



キセルアザミの葉（刺がある）

タムラソウはM地点では見られなくなりましたが、作業後すぐに発芽・開花し、順調に個体数が増え、今年は**30個体**になりました。

タムラソウは作業後すぐに復活しましたが、コオニユリは作業後3年目でようやく復活しました。これは大規模植生回復作業により発芽環境が整ったとしても、実際に発芽するまでには時間がかかる種があるということを示していると思われま

2) ヌマトラノオ

今回確認されたヌマトラノオはF地点の旧水田脇にあったスギの伐り株の根元から発芽しました。ここはかつてヌマトラノオが自生していたところ

です。このスギは平成24年度の作業で伐採し、太かったので抜根せずそのままにしています。平成28年度の作業で道路の拡幅をした際にバックホーで抜根しようとした

が、あまりに大きく無理に抜根すると旧水田の北西隅を破壊することになるので、途中で作業をあきらめた伐り株です。作業はバックホーで伐り株をつまんでゆす

ただけです。つまり、根の周囲を掘るような大きな攪乱は加えておらず、地表面がゆすられるようなわずかな攪乱に留まったところ

です。ヌマトラノオは木を伐っただけでは4年間待っても復活しませんでした

が、バックホーで軽い攪乱を与えたら翌年に発芽したということになります。これは、ヌマトラノオの埋土種子がスギの根元の地表面近くのごく浅い所に眠っていたことを示しており、木を伐っただけでは発芽できる状況にはならず、地表面がゆすられた時にわずかに移動して発芽できる状態になったためと考えられます。

3) トモエソウ

トモエソウは、これまで葦毛湿原の指定地内では確認されてい

ませんでした。今回はL地点の上流部で発芽・開花を確認しました。他の復活例と同じように、少なくとも30年以上前の埋土種子からの復活と考えられます。葦毛湿原調査員の観察では、昨年発芽したが生長せずに消えてしまい、今年開花が確認できたそうです。発芽は作業後2年目、開花は3年目ということになります。発芽の翌年に開花するのは、サワオグルマと同じで、開花するためには根に養分を溜める必要があるのかもしれない



ヌマトラノオ



トモエソウ